令和２年度３学期終業式校長式辞（令和３年３月１９日）

おはようございます。このように対面で集会が実施できることを嬉しく思います。これは、皆さんの日々の新型コロナウイルス感染症対策ができていることにもよります。もちろん、まだまだ日々県内でも感染は発生しています。学校の内外でしっかりと予防対策を行うとととともに、結果として何が起きても、差別につながる行動をしてはなりません。

さて、今日は、３学期を振り返るとともに、令和２年度を振り返る日でもあります。皆さん一人一人はコロナ禍での不自由な日々をどのように生き、何をどこまで成長させてきたでしょうか。そして、これからどこへ行こうとしているのでしょうか。いずれにしてもまずは、今この瞬間、自分に対して、よくやったと胸を張ってください。

３月２日の卒業式では、３５０人の卒業生が、高校生活を振り返りました。在校生は、２年の吉田伊吹生徒会長一人が代表として出席し、先輩に対して、素晴らしい感謝のことばとエールを送ってくれました。

答辞では、卒業生代表の木村真美子さんは次のように述べました。

「入学したばかりの頃、毎日は私にとって楽しむというよりも必死にこなしていくというものに近いものでした。朝からやり切れていない分の予習をして授業を受けて、複数所属していた部活動に参加して、塾に行って、家でまた明日の予習をしたら一日は終わり。」

それでも木村さんは、「叱っては励まし、また叱る先生」「自分が敵わないほど努力する友人」「一人で落ち込みたいときにも容赦なくぶつかってきてくれる友人」がいて、朝日高校で３年間過ごすことの意味が見えてきたと言います。さらに次のように言います。

「自分が何に必死になるのかも、必死になることの理由も、３５０人に聞けば３５０通りの答えが返ってくるのが当然でしょう。それでも何か一つ、ことばで言い表すのなら、様々な人に出会い、様々な思いに触れ、狭かった景色が大きく開けていくような体験、小さな井戸にいた蛙が、知らない世界に一歩踏み出したかのような体験、それができるのが、この朝日高校なのだと思います。」

また、コロナ禍での未曾有の状況の中、一人一人の視線の先には目指

すものがあり、個人で、クラスで、学年で成し遂げたとき、何物にも代え難い達成感と誇らしい思い出が得られたと言います。そして、３年間を振り返って、次のように言います。

「『これでよかった』卒業のときを前に、胸を張ってそう口にすることができます。長いようであっという間であった高校生活は今日で終わりを告げます。『井の中の蛙大海を知らす』３年前の私たちはまさに、狭い井戸の中しか知らないままにこの朝日高校に飛び込みました。初めて見る世界に戸惑いの混ざった喜びを覚えつつ、懸命に過ごす中で見える世界はずいぶんと広がりました。しかし、朝日高校という場所も、いわば一つの大きな井戸にすぎません。私たちはまだまだ、井戸の中の蛙、いまだ見ぬ大海へは今日から自分の力で泳ぎだしていきます。そして、よく知られたこの諺には、次のような続きがあると言われています。『井の中の蛙大海を知らず　されど空の青さを知る』この場所で、この仲間で、この３年間を過ごしたからこそ、頭の上には今青い空が見えます。」

答辞の多くのは、朝日祭についての熱い思いが語られていたのですが、ここでは、私が皆さんに期待することという観点から、３点にまとめます。

〇目の前のことに愚直に一生懸命努力すること。その一方では、努力や自分の行為についての意味、理由、大きな目的、夢を、自分なりに把握しようとすること

〇自分の存在を大切にすること。その一方では、友人、先生等多くの他者と「関わりや関係」をもつこと

〇クラス、学年、高校等今自分のいる場を大切にし、共通体験を深めること。その一方で、広い世界に出る準備をすること

この三つのことは、大学や大学の向こう側の社会においても大切なことであると思います。

皆さん一人ひとりが、令和２年度とこの３学期をしっかりと振り返り、自分自身を大切にしつつ、一人ひとりのありようで成長することを期待しています。

（県立岡山朝日高等学校　校長　竹田義宣）